

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：13601
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520051
 研究課題名(和文) ラトナキールティの宗教哲学研究 ブッダと主宰神の宗教的権威の証明に関する比較考察

 研究課題名(英文) A Study on Ratnakirti's Religious Philosophy: A Comparison between the Proofs of the Authorities of the Buddha and a Hindu God

 研究代表者
 護山 真也 (MORIYAMA, Shinya)

 信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

 研究者番号：60467199

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、11世紀に活躍したラトナキールティの『全知者証明』と『主宰神証明の論駁』の訳注研究を中心としながら、宗教と哲学、信仰と論理的探究とが不可分の形で融合するインド的思考の特徴を考察した。二作品の文献実証的な研究を基礎として、アヴィッドカルナに帰せられる断片資料の受容の問題、全知者性や主宰神などの超越的な事柄を経験的世界の実例を通して合理的に説明づける構造とその限界などを考察した。

研究成果の概要(英文)：This study has examined two works of Ratnakirti, the Sarvajnyasiddhi and the Ishvarasadhanadusana and their related materials for clarifying some specific features of Buddhist religious philosophy. Based on Japanese translations together with philological annotations of the two works, the study has achieved the following results. First, with regard to a fragment of Aviddhakarna's proof of God's existence, the controversy concerning causality between the Nyaya-Vaishesika and the Sankhya is assumed to be one of its significant backgrounds. Second, the implicit reasoning for connecting a general conclusion to a specific conclusion, or an empirical example to a transcendent target, in the variety of proofs of God's existence is examined specially in relation to the Nyaya concept of "essential nexus." Many parts of those results including some comparative philosophical views have been presented in international conferences and symposiums, and published in JIP, etc.

研究分野：インド仏教認識論

 キーワード：主宰神 神の存在証明 ラトナキールティ ダルマキールティ 全知者 宗教的権威 プラマーナ ニ
 ヤーヤ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、インド仏教最後期に活躍したラトナキールティの二作品、『全知者証明』(*Saravajñasiddhi*)と『主宰神証明の論駁』(*Īśvarasāadhanadūṣaṇa*)の訳注研究を中心としながら、宗教と哲学、信仰と論理的探究とが不可分の形で融合するインド的思考の特徴を明らかにすることを目指して開始された。

ラトナキールティの宗教哲学を理解するためには、6世紀から7世紀にかけて活躍したニヤーヤ学派のウッディヨータカラ、ミーマンサー学派のクマーリラ、そして仏教認識論・論理学の大成者であるダルマキールティが展開した宗教的権威(*pramāṇa*)をめぐる議論を理解しておかねばならない。幸いにして、彼らの主宰神論証、ヴェーダ聖典擁護論、そしてブッダの権威論証の主要部分は、G. Chemparathy, “Aufkommen und Entwicklung der Lehre von einem höchsten Wesen in Nyāya und Vaiśeṣika” (Ph. D. Thesis, University of Vienna, 1963), F. X. D’Sa, *Śabdaprāmāṇyam in Śābara and Kumārila* (Vienna, 1980), E. Franco, *Dharmakīrti on Compassion and Rebirth* (Vienna, 1997)等の優れた先行研究により解明されている。

加えて、ダルマキールティ以降の主宰神論証とその論駁についても、2002年にH. Krasserが公刊した*Śāṅkaranandanas Īśvarāpākaraṇasaṅkṣepa*の序論で思想的な俯瞰がなされた。また、特にラトナキールティの宗教哲学に関しては、G. Bühnemann著*Der allwissende Buddha* (Vienna, 1980)が『全知者証明』の信頼ある独訳注研究を提供した。さらに、P. Patil著*Against a Hindu God* (New York, 2009)は『主宰神証明の論駁』の内容紹介を含め、ラトナキールティの宗教哲学の全体を解明しようとした意欲作であり、本研究を遂行するにあたり、最も参考となった研究である。

以上のような先行研究を背景としながら、筆者は2006年にウィーン大学に提出した博士論文“Omniscience and Religious Authority”にて、ダルマキールティの『認識論評釈』(*Pramānavārttika*)第二章、8-10詩節ならびに29-33詩節に対するプラジュニャーカラグプタの注釈『認識論評釈莊嚴』(*Pramānavārttikālankārahāṣya*)のテキスト校訂・英訳注を行い、主宰神証明の論駁とブッダの全知者性の証明との間には、コインの表裏のような密接な関係があることを論じた。そして、従来は別々の思想的な文脈で理解されてきた主宰神証明に関する議論とブッダの全知者性に関する議論とを有機的に連関させることで、プラジュニャーカラグプタの認識論・論理学は、〈全知者性〉をめぐる彼の思索に裏付けられたものであることを明らかにした。

だが、その研究で得られた結論——インド哲学における認識論・論理学の枠組みは、そ

れぞれの思想家が属する宗教・宗派の教義的な制約から見直されるべきこと——が、プラジュニャーカラグプタ以降に活躍した仏教徒たちの議論にも同様にあてはまるのか、ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派やシヴァ教の哲学者たちの議論の場合はどうなのか、等は、その段階では手つかずの課題として残された。

2. 研究の目的

およそ以上のような学術的背景の下、本研究の目的は、11世紀にヴィクラマシーラ僧院で活躍した碩学ラトナキールティの『全知者証明』と『主宰神証明の論駁』に対する文献実証的な解読研究を基盤とし、ブッダや主宰神などの宗教的権威をめぐる議論が、どのような形で、各宗教・宗派の認識論・論理学に影響を与えたのか、を解明することにあつた。そのため、以下の諸点が本研究の具体的目標として定められた。

- (1) 研究の基礎となる『全知者証明』・『主宰神証明の論駁』の二書に関して、サンスクリット写本を用いたテキスト校訂を行い、また、そこで引用される他学派の議論などを同定し、インド神学史を再構築する上でも有意義な注を含む、詳細な訳注研究を完成させること。
- (2) 『主宰神証明の論駁』において批判対象となるニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の議論を整理し、断片的資料をインド神学史の中に位置づけるための方法論を確立すること。
- (3) ブッダや主宰神などの宗教的権威を証明するための推論式では、必然的に、われわれの経験的世界では処理することのできない、超越的对象が論証対象とされるが、経験的なものと超越的なものをつなぐ論理とはいかなるものだったのか。その点を周辺資料から解明すること。
- (4) インド神学に登場する種々の推論式をキリスト教神学における神の存在証明(宇宙論的証明、デザイン論証、存在論的証明など)と比較し、インド的な宗教哲学の特色を浮き彫りにすること。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、それぞれの具体的目標に対して、以下のような方法で研究を遂行した。

- (1) 基礎研究となる『全知者証明』・『主宰神証明の論駁』のテキスト校訂・訳注研究に関しては、まず信州大学図書館に不足している関連資料の蒐集からはじめ、Patil等の先行研究を網羅的に把握し、各年度毎に解読の目標を定めて、テキストの入力・訳注研究を遂行する。引用断片の同定にあたっては、稲見正浩教授(東京学芸大学)が主宰するプラジュニャーカラグプタ研究会での情報なども参考にする。

(2) 主宰神論証に関する断片研究については、特にインド神学におけるデザイン論証の嚆矢となるアヴィッダカルナの推論式の断片資料については、仏教やニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の資料のみならずシヴァ教の文献なども視野に入れ、包括的な検討を加える。また、オーストリア科学アカデミーでインド哲学における断片資料の調査を遂行している E. Prets 博士との連携を行う。

(3) ブッダの全知者証明、主宰神の存在証明などにおける経験的なものと超越的なものをつなぐ論理の解明については、漢訳文献なども視野に入れ、〈宗教と論理〉という広い枠組みから、問題を捉えなおす作業を行う。

(4) キリスト教神学関係の文献を蒐集するとともに、比較思想・比較神学に関する学会・ワークショップへの参加を通して、まずは方法論上の問題点を整理することからはじめる。その上で、神学の基盤となる認識論関連のテキスト (W・セラーズの論考など) を精読し、東西思想の比較を試みる。

4. 研究成果

上記の目的に即した形で、本研究の成果をまとめると次のようになる。

(1) 基礎研究となる『全知者証明』・『主宰神証明の論駁』訳注研究に関する成果

①本研究に対する重要な先行研究である P. Patil 著 *Against a Hindu God* に対する書評論文 (和文・英文) を著し、インド仏教の宗教哲学研究に対する多大な貢献を評価しつつも、ラトナキールティの存在論の体系に関する理解については、特に自己認識に顕現する対象の位置づけ、そして〈差異化の実体視〉 (bhedāvasāya) の機能について再考の余地があることを指摘した。

②『全知者証明』については、G. Bühnemann の独訳研究を参考にしながら、全訳研究を完了した (未公刊)。

③『主宰神証明の論駁』については、『南アジア古典学』第 9 号 (2014) に「ラトナキールティ著『主宰神証明の論駁』和訳研究 (上)」としてその解読成果を発表した。そこでは、同書の構成を科段で示すとともに、ジュニャーナシュリーミトラの『主宰神論』 (*Īśvaravāda*) やヴァーチャスパティ・ミシュラ等の他学派の著作からの引用・平行箇所を同定し、一覧で提示した。同様に、続編となる二篇の論文も順次、公刊される予定である。

(2) ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の主宰神論証の断片資料に関する研究

①2012年8月に信州大学で開催された日欧共同国際シンポジウム「伝承知の継承と発展」において "Another Look at the Īśvarasādhana-Fragment of Aviddhakarṇa" と題する発表を

行い、アヴィッダカルナに帰せられる主宰神論証 (インド神学におけるデザイン論証) の断片を分析し、この推論式が形成された背景には、ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派と仏教との抗争というよりむしろ前者とサーンキヤ学派との間で展開された因中無果論と因中有果論との対立が想定されるべきであると指摘した。その際、アヴィッダカルナに先立つサーンキヤ論師として『六十科論』 (*Saṣṭitantra*) を著したヴァールシャガニヤが考えられ、実際、ジネンドラブディの『集量論注』から回収されるヴァールシャガニヤの資料には、アヴィッダカルナの推論式の表現 sanniveśaviśiṣṭatva や dvīndriyagrāhyagrāhya を理解するために有益な議論が含まれることにも注意を喚起した。本発表は同シンポジウムの成果をまとめたモノグラフの中で公刊される予定である。

②2013年6月にライプチヒ大学で行われた国際ワークショップ「アビナヴァグプタをめぐる」では、“Utpaladeva’s criticism of the Sāṃkhya theory of causation and soteriology.” と題する発表を行った。上述のアヴィッダカルナの主宰神論証の断片は、カシミール・シヴァ派の巨匠ウトパラデーヴァの『主宰神証明』 (*Īśvarasiddhi*) でも援用される。興味深いことに、そこでは上記①の考察を裏付けるように、ニヤーヤ学派とサーンキヤ学派の因果論をめぐる論争が記録されている。発表では、そのことの意義を考察し、とりわけ、ウトパラデーヴァが二種類の協働因 (sahakārin) の考えを導入した背景には、『ユクティ・デーピカー』の議論からの影響があること、それはカシミールにおけるサーンキヤ哲学の受容の問題とも関連することを指摘した。

③2014年11月には、オーストリア科学アカデミーの E. Prets 博士が来日した折に、信州大学にて、インド哲学における断片資料のデータベース化をめぐる講演を企画し、断片資料の扱い方をめぐる討議を行った。

(3) 宗教的権威をめぐる論証における経験的なものと超越的なものを接続する回路をめぐる考察

①上記の(2)の考察とも関連するが、インド哲学では、それぞれの宗教的権威を確立するために種々の推論式を提示する。すなわち、仏教もバラモン教も、それぞれの超越的な存在を他者に向かって説得するために、奇跡を見せたりするのではなく、あくまでも推論を通して他者の理性に訴えかける道を選ぶ。だが、それぞれの宗教的信念が衝突する討論の場面では、いずれが正しいのか決着がつかないケースが多数を占める。ひとたび超越的な対象が推論の主題となるや、それは二律背反 (antinomy) をひきおこすからである。インド論理学では、そのような場合の理由概念を「相違決定」 (viruddhāvhyabhicārin) と呼び、擬似的な理由に分類する。2012年10月に台

北で行われた国際ワークショップでは、この相違決定に関するディグナーガ、ダルマキールティ、そして玄奘門下の窺基の解釈を比較しながら、宗教的命題と論理との関係について考察を示した。それによれば、相違決定とは、本来、敢えて対論者の主張の前提を認めながら、そこから自己論駁的な結論を導くことを主眼としていたはずである。だが、討論の伝統が弱まるにつれ、むしろ、異なる宗教・宗派間の議論で超越的なものに対する二律背反が生じることを意味するものと解釈されるようになった。別の言い方をすれば、かつては宗教間で自由な討議が可能であったのに対して、それぞれの教義に応じた論理学の体系が構築されるにつれ、超越的なものをめぐる推論式は、ダルマキールティ以降に確立された論理学の体系の中で曖昧な位置へと追いやられたわけである。

②同様の点は、2014年8月にウィーン大学で開催された国際仏教学会(IABS)での発表とも関連する。“On dharmisvarūpaviparītasādhana”と題した発表では、伝統的に「四相違」(viruddha)と呼ばれてきた擬似的理由の中の〈有法自相相違因〉に焦点をあてて、その特殊な機能を分析した。この〈有法自相相違因〉をふくめ、四相違の最後の三つはいずれも、言葉の上では明示されない、隠された論証対象を前提とする推論式にかかわる。その代表的なものが主宰神証明である。その証明では、「知的作者」という言葉の裏側に「全知全能の主宰神」という暗示を読み取らなければならないからである。〈有法自相相違因〉の場合には、その隠された論証対象は、論証対象の主題そのもの(dharmi-svarūpa)である。例えば、〈存在性〉(bhāva)という主題には、〈実体・性質・運動とは異なるカテゴリー〉という本性が含意されているのだが、その背後にある幾つかの前提を操作することで、〈存在性は、そのような存在性ではない〉という結論が導かれる。その背後の論理を解明するために、漢訳資料を含めた諸注釈の検討を行い、主題とは別に同類例を立てる、ディグナーガ流の論理学に従う限り、あらゆる推論式がこの過失から逃れえないことを示した。ダルマキールティが論理学の体系に〈有法自相相違因〉を導入しなかった理由も、その危険性に敏感であったがためだと推測される。

③こうして討論の場面では扱うことのできた超越の対象も、各宗教・宗派による論理学の整備が進むにつれて、その扱いが困難なものへと転じた。その中であって、ニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派の者たちは、超越的なものと経験的なものとの連絡をつけるために、〈本性上の関係〉(svābhāvikaḥ sambandhaḥ)という概念を導入し、必ずしも経験的なものだけから導かれるわけではない、二項間の必然的關係を正当化する道を模索した。また同時に、〈主題所属性〉(pakṣadharmatā)等の論理学上の概念を再解釈することで、一般的

論証対象の背後にある、特殊な論証対象を証明できる、とされた。これに対する仏教徒側の反論が、『主宰神証明の論駁』の主要部分であるが、その点は成果(1)の③で言及した訳注研究の中で若干の考察を加えてある。

(4) 比較神学のための予備的考察

①ニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派の主宰神論証とキリスト教神学における神の存在証明との比較については、『真実綱要』(Tattvasaṅgraha)第2章の全詩節の翻訳を行った上で、先述のアヴィツダカルナの推論式がデザイン論証と対応する構造をもつこと、また、ウッディヨータカラに帰せられる推論式には宇宙論的論証と共通して、世界生成の第一原因を探求する道が示されていることを確認した。また、アンセルムスが提示した神の存在論的証明については、ヨーガ学派のヴィヤーサによる主宰神の全知者性証明に一見すると類似した構造を見いだせるが、仔細に検討すると、両者に共通点がないことが分かる。しかながら、アンセルムスの証明に対するガウニロの批判、ヴィヤーサの証明に対するマンダナ・ミシュラの批判には、〈無限〉と〈それ以上、大なるものを想定することができない最大者〉との間にある矛盾を指摘する、という共通点が見出せる。

②以上の論点は、広くインド哲学と西洋哲学との比較研究の中で再考された。筑波大学で2014年、2015年に開催された比較思想のワークショップ(国内、国際)では、ラトナキールティの宗教哲学の基盤となるダルマキールティの認識論、特にその知覚論の構造について、セラーズが提示した〈所与の神話〉(Myth of Gigen)との比較、また、カントとその解釈者たちが論じた〈構想力〉(Einbildungskraft)とダルマキールティとその注釈者たちの adhyavasāya との比較考察を行った。二つの発表に共通する視点は、仏教認識論の独自性をその宗教的背景の中に求めたことである。翻れば、このことはまた、宗教的権威をめぐる本研究の暫定的な結論とも通じるものがある。すなわち、全知者論証、主宰神の存在証明、いずれの場合にせよ、仏教徒を含むインド哲学の学匠たちの議論が目指したものは、自らとは立場を異にする他者に向かつて自らの信奉する宗教的権威(pramāṇa)の妥当性を〈合理的〉に説明づけることであつたのだが、彼らの意図に反して、その説明の基盤となる認識手段(pramāṇa)そのものは、それぞれの宗教的教義の制約を受けざるをえなかった。この点は、インド哲学の諸議論と西洋哲学の諸議論とを比較する際に銘記されるべきものと思われる。

なお、本研究の当初の目的には記載していなかったものの、本研究を遂行する過程において、ラトナキールティと対立する認識論的立場をとるラトナカラシャーンティの形象虚偽論に関する論文、プラジュニヤーカラ

グプタの宗教的権威をめぐる諸議論を考察した図書、ならびに彼の〈知覚=存在〉説に関する論文を公刊することができた。以上も、本研究の成果の一環である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 護山真也, 「仏教認識論と〈所与の神話〉」, 『信州大学人文科学論集』第2号, pp. 43-56, 2015, 査読有
- ② Moriyama, Shinya, “Toward a Better Understanding of Ratnakīrti’s Ontology,” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhāṣā* 32, pp.47-59, 2015, 査読有
- ③ Moriyama, Shinya, “A Comparison between the Indian and Chinese Interpretation of the Antinomic Reason (*viruddhāvyabhicārin*),” Michael Radich & Chen-Kuo Lin (eds.), *A Distant Mirror (Hamburg Buddhist Studies 3)*, pp. 121-150, 2014, 査読無
- ④ Moriyama, Shinya, “Ratnākaraśānti’s Theory of Cognition with False Mental Images (**alīkākaravāda*) and the Neither-One-Nor-Many Argument,” *Journal of Indian Philosophy*, 42, pp. 339-351, 2014, 査読有
- ⑤ 護山真也, 「ラトナキールティ著『主宰神証明の論駁』和訳研究(上)」, 『南アジア古典学』第9号, pp. 229-257, 2014, 査読有
- ⑥ 護山真也, 「プラジュニャーカラグプタの〈知覚=存在〉説に関する一資料」, 『信州大学人文科学論集』第1号, pp. 51-73, 2014, 査読有
- ⑦ 護山真也, 「ラトナーカラシャーンティのプラマーナ論に関する一資料」, 『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』, pp. 771-782, 2014, 査読無
- ⑧ Moriyama, Shinya, “On the role of *abhyupagama* in Dharmakīrti’s scripturally based inference,” H. Krasser et al (eds.), *Scriptural Authority, Reason and Action*, pp. 183-207, 2013, 査読無
- ⑨ Moriyama, Shinya, “Ratnākaraśānti’s criticism of the Madhyamaka refutation of causality,” *China Tibetology* 1, pp. 53-66, 2013, 査読有
- ⑩ 護山真也, 「ラトナキールティの存在論—パティルが提起した対象の四分類に対する批判的検討—」, 『信州大学人文学部人文科学論集<人間情報学科編>』第47号, pp. 17-38, 2012, 査読有

[学会発表] (計8件)

- ① Moriyama, Shinya, “Adhyavasāya and Imagination.” International Symposium:

Philosophy across Cultures (招待講演). 2015.3.6. 筑波大学.

- ② Moriyama, Shinya, “On *dharmisvarūpa-viparītasādhana*.” 17th Congress of the International Association of Buddhist Studies. 2014.8.22. ウィーン大学(ウィーン、オーストリア).
- ③ 護山真也, 「仏教認識論における所与(given)」(招待講演), ワークショップ「仏教認識論と比較思想の可能性」, 2014.3.6. 筑波大学.
- ④ Moriyama, Shinya, “On *sattopalambhavāda* or an Indian version of *esse is percipi*.” XXIII World Congress of Philosophy. 2013.8.7. アテネ大学(アテネ、ギリシア).
- ⑤ Moriyama, Shinya, “Utpaladeva’s criticism of the Sāṃkhya theory of causation and soteriology.” International Workshop: Around Abhinavagupta. 2013.6.10. ライプチヒ大学(ライプチヒ、ドイツ).
- ⑥ Moriyama, Shinya, “A comparison between the Indian and Chinese interpretations of the antinomic reason (*viruddhāvyabhicārin*).” Workshop on Buddhist Logic and Epistemology in Chinese Sources. 2012.10.12. 国政政治大学(台北, 台湾).
- ⑦ Moriyama, Shinya, “Another Look at the *Īśvarasādhana*-Fragment of *Aviddhakarṇa*” Japan-Austria International Symposium on Transmission and Tradition: The Meaning and the Role of Fragments in Indian Philosophy. 2012.8.21. 信州大学.
- ⑧ Moriyama, Shinya, “Ratnākaraśānti’s criticism of pseudo- Madhyamikas” The 5th Beijing International Seminar on Tibetan Studies. 2012.8. 中国蔵学研究中心(北京, 中国)

[図書] (計1件)

- ① Moriyama, Shinya, *Omniscience and Religious Authority. A Study on Prajñākaragupta’s Pramāṇavārttikā-lāṅkārahāṣya ad Pramāṇavārttika II 8-10 and 29-33*. Berlin-Münster-Wien- Zürich-London: LIT Verlag, 2014.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

護山 真也 (MORIYAMA, Shinya)
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 60467199